

---

# エドワード・M. ガローデット (1837-1917)

## の聾啞者観 (続)

上野 益雄

---

### はじめに

筆者は先に、つくば国際大学紀要Vol.3において、E. M. ガローデット (E. M. Gallaudet) のヨーロッパ視察および第一回の聾啞施設長会議における提案を検討し、さらに、彼の手話に対する基本的考え方を考察した。

手話に対する考え方については、この時代の教育者たちの言うことは、部分部分を取り出してみると矛盾したことも、しばしば見られる。E. M. ガローデットはその述べていることも、比較的一貫しているのであるが、はたして彼の真意はどうであるのか、本講では、前講を補いながらさらに検討を加えることにする。

### 1. 問題提起

1867年3月、B.インゲルスマン (Bernhard Ingelsmann) によって口話法の施設 (New York Institution for the Improved Instruction of Deaf-Mutes)<sup>1</sup>がニューヨークに設立され、7月には口話法の中心となるクラーク聾啞院 (Clarke Institution for the Deaf-Mutes)<sup>2</sup>が認可された。E. M. ガローデットは、クラーク聾啞院が認可される前に、ヨーロッパの聾啞施設の視察にでかけ、6カ月後の1867年10月23日そのレポートをコロンビア聾啞院の理事会に提出した。

1860年代、ニューイングランドを中心に、聾啞教育における口話法に対する社会的関心が高まり、従来の手話を主とする指導法が見直されつつある状況にあった。すでに1843年のホレース・マン (H. Mann) の報告を受けて、翌年ニューヨーク聾啞院のG. E. デイ (G. E. Day) とハートフォード聾啞院のL. ウェルド (L. Weld) はヨーロッパ視察にでかけ、1851年にはさらにニューヨーク聾啞院のH. P. ピート (H. P. Peet) が息子I. L. ピート (I. L. Peet) と共に視察に行っている。彼らの報告では“アメリカの聾啞教育の指導方法はヨーロッパのものに決して劣ってはいない”というものであった。1859年には再度G. E. デイがヨーロッパへの視察に出かけた。「半聾・半啞 (Half-deaf-half-mute) のものには発音指導が可能であり、その他特別な資質を持つものにも発音の指導が可能なものがある」ことをいくらか詳しいデータで示しながらも、基本的にはアメリカの聾啞教育がヨーロッパのそれに比べて劣らないという従来主張と同じものであった<sup>3</sup>。しかし1860年代に入って、時代の流れは従来の手話法の見直しが迫られる状況にあった。コロンビア聾啞院の理事たちは、

施設長 E. M. ガローデットをヨーロッパへ派遣した。

はじめに述べたように、本稿においては、施設長会議における主張とそれを裏付ける彼の聾啞者観について、さらに見ていくことにする。

## 2. エドワード M. ガローデットのプロフィール

エドワード M. ガローデット、彼は、当時の聾啞院が手話を主として教育の手段として用いていた状況下で、スピーチ指導を勧告し、手話とスピーチのいわゆる併用法の提唱者として、聾教育史上知られている。また聾者の大学であるガローデット大学を創設し初代学長として、聾教育界のリーダーとしての役割を果たしたことで有名である。

彼は、聾教育史上においては、その時代のもう一人のチャンピオンであるアレクサンダー G. ベルと対立している。ベルは、電話の発明者としてはもちろんのこと、ヘレン・ケラーとの友情においてもよく知られている。ベルは、聾啞者のスピーチ使用のみを主張し、手話の廃止を訴えた。

このベルに対して手話の城壁を守った一方の旗頭がエドワードである。彼は1837年にコネチカット州のハートフォードに生まれた。父トーマス H. ガローデット (1787-1851) は、アメリカで最初の公的な聾啞施設の長としての榮譽を担っている。現在ワシントン D. C. にあるガローデット大学の正面にある像は父親トーマス H. ガローデットを記念したものである。エドワードはその8番目の末息子として、父が50歳のときに生まれた。

エドワードは最初、父と同じように聾啞施設の教師になるつもりなどはまったくなかった。エドワードが12歳のとき、父から将来のことについて尋ねられ、聾啞のために働くことは生きがいのある仕事であると勧められた。この時彼は、高校教育を終えたらすぐビジネスマンになるのだと答えている。2年後の1851年10月父は、エドワードが14歳の時に亡くなった。父の死後エドワードは、父の言葉を思い起こし、トリニティ・カレッジへ進むことを決意した。ハートフォードの聾啞院長であった、W. W. ターナーから教師になるよう勧められ、聾啞院で教え始めた。2年後の1857年に彼はある事情から、中国への宣教師になるため、その資金を作ろうとシカゴ銀行で働こうとしていた。彼がシカゴへ行く直前にワシントン D. C. の資産家アーモス・ケンダルからの手紙を受け取ることになる。ケンダルは、そのときすでに70歳代であったが、ジャクソン内閣の閣僚でもあった。彼は当時、聾啞施設を創る計画を持ち、議会に働きかけていた。同時にその聾啞施設の管理者となる人物を探していた。ニューヨーク聾啞院の I. L. ピートの推薦を受け、エドワードは若干20歳で、新設のコロンビア聾啞院の院長となった。ただし、施設の寄宿舎の責任者として、エドワードの母親であるソフィアがあたるのが条件であった。ケンダルからの依頼は、彼の夢を実現させる第一歩となった。

1857年6月13日、若干20歳のエドワードはコロンビア盲聾啞院長としての仕事が始まった。母親のソフィアは生まれつきの聾啞であった。われわれはここで、母親のソフィア (19歳で初めてハートフォード聾啞院で教育を受け、3年後に彼の父親と結婚した。結婚後はハートフォード聾啞院の養母として夫の仕事を助けた) が如何に信頼された人物であったかに注目する必要がある。

コロンビア聾啞院が高等教育機関として学位を与えることができるよう議会で要望書を提出したのが、1864年4月8日。リンカーン大統領の署名によって、ここに現在のガローデット大学（当時は国立聾啞大学）が誕生したのである。

最初の学生はすでにハートフォードの高等部を卒業し、コロンビア聾啞院が教えていた、Melville Ballard ただ一人であった。次のような逸話が残っている。彼が行くところ彼自身がカレッジであった。「カレッジが町へ行く」「カレッジが寝室へ入る」「カレッジがシャワーを浴びている」等々。

政府の援助を受けるための努力は並大抵のものではなかった。しかし、エドワードの才能は大学の経営面にも表れている。政府の要人とも知り合い、YMCA の設立に寄与し、ワシントン文学協会をはじめいくつかの協会の主要なメンバーでもあった。彼は、指導者としてのカリスマ性をも備えていた。彼はフランス語、ドイツ語に堪能であり、もちろん手話言語は母親ゆずりの流暢なものであった。1869年トリニティ・カレッジとジョージワシントン大学から名誉博士を、1895年にはエール大学から著書と国際法の論文に対して博士号を受けている。

2つの口話法の聾学校の設立を目の当たりにして、エドワードはその年の5月ヨーロッパへ旅立ち6カ月の視察を終えて10月にはコロンビアの理事会へ、報告書を提出した。エドワードはこの報告書において、アメリカの聾啞教育の見直しを勧告し、翌1868年5月第1回の全米聾啞施設長会議を招集、そこで従来の手話法に代わって、スピーチ指導の導入を併せる併用法を提唱したのである。ベテランの教師たちからは、「手話を守った父親の名を汚す親不幸な息子」との非難を受け、また口話法の信奉者からは、スピーチ指導を導入するとはいえ、依然として手話を容認する不徹底なものとして非難された。聾啞院の教師たちの中には、もちろんエドワードの主張に賛成する教師たちも多くいた。

時代の流れは大きく変わろうとしていた。聾教育史上、併用法は第1回施設長会議において、満場一致で採択されたということが言われたが、実際には会議は紛糾したのである。

1876年ベルは電話の発明の特許を取り、3年後の1879年にワシントン D. C. に移り、そこでエドワードと会う。ベルは聾啞者に手話を許すと発音と読話の妨げになるとして手話を認めなかった。ベルは、父親から受け継いだビジブル・スピーチという発音訓練の方法を改良し、それをもってクラーク聾啞院やハートフォード聾啞院などでスピーチの実験指導を行った。1880年にイタリアのミラノにおいて、第2回の聾教育国際会議が開かれた。ここにアメリカから代表5人が参加した。この会議では、口話法がその他の手話を用いる方法よりも優れていること。聾啞者の社会参加のためには手話をなくして、口話法を採用する必要があることが決議された。エドワードはこの決議には大いに不満であった。

1891年エドワードは議会へ教員養成のための師範部設立を求めた。G. A. ベルは猛反対をした。師範部には聾の学生は入れてはならないことを強く主張した。師範部で手話が行われ、手話による教師、それも手話を使う聾の教師を養成することを、ベルは認めず妨害した。ベルは、当時の優生学、社会進化論の影響を受けながら、聾という悪い遺伝子をなくすことを考えていた。したがって、聾者同士の結婚を避けるよう呼びかけていた。手話によって聾者同士がより強く結び付くことに反対であった。1890年、ベルは、「アメリカ聾スピーチ促進連盟」を設立、初代委員長となった。手話

を排除する団体として、従来からのアメリカ聾教育者会議とは対立した。ちなみに日本の大正14年(1923), アメリカに遅れること34年して結成された「聾口話推進連盟」は、このベルたちの運動の後を追ったものである。(日本ではまたたく間に、この口話法運動は全国に広まっていった。)

1917年父親が初代院長を勤めたハートフォード校100年記念を見届けて、9月26日ハートフォードで亡くなった<sup>5</sup>。

### 3. 社会的背景

1840年代、すでに W. E. チャニング (W. E. Channing) は古い宗教でなく新しい人道主義と社会改革をめざす宗教を叫び、口話法を推奨したホレース・マンはアメリカの文明を蝕む文盲をなくし民衆が知識と技術をもつことが社会の改善に役立つことを説いた<sup>6</sup>。H.マンとともにヨーロッパを視察した S. G. ハウは、手話法を厳しく批判し口話法の施設の設立運動をバックアップした。口話法による施設の設立運動を進めた G. G. ハバード (G. G. Hubbard) や F. B. サンボーン (F. B. Sanborn) らは、すべて R. W. エマーソン (R. E. Emerson) を中心とするコンコード・グループのメンバーたちであった。それに対して従来の施設の教師たちはオーソドックスな会衆派や長老派に属するピューリタンたちであり、あまりにも保守的であった。

しかし、これら聾啞施設の教師たちの間にも、手話体制の中でさまざまな意見が出され必ずしも教育方法に関して一致した意見ではなかった。まさに変化する時代の前夜であった。しかし聾啞教育における手話の位置づけをめぐる討論の中で、施設の指導者のおおかたの意見は、発音指導の実際の可能性については否定的であった。目標は書記言語の習得であった。しかし、その成果はあがらず、英語を使用できるものはごく僅かであったことは、教師たちの悩みでもあった。聾啞教育の進展へと向かう時期に、言語の指導実績をあげたいという願いが教師たちにあった。特に聾啞大学の学長として聾啞者の高等教育の責任を持つ E. M. ガローデットは、このことを痛切に感じていた。若い E. M. ガローデットは、時代の空気を感じており、聾啞教育も新しく変わらねばならないという実感を持っていたのである。

### 4. E. M. ガローデットの提案

#### (1) アメリカの現在の聾教育の欠点

1868年の施設長会議において、E. M. ガローデットは、アメリカの聾啞教育の欠点を3つあげている。

##### ①教育開始年齢のおそいこと

聾啞施設の教育者たちは教育開始の年齢は10歳から12歳が適当であるという考えであった。しかし、E. M. ガローデットは、10歳の入学では遅いという。普通の子供はすでに幼いころから言語を学んでおり、しかも聾啞児よりもっと早い年齢で学校へ行く。それに対して、聾啞児は10歳まで知識は殆ど白紙の状態であり、それから正式な教育をしなくてはならない。施設が始まったころは、

聾啞教育は一般にその可能性も疑問視されていたが、今では聾啞児の教育は誰にでもその有用性が認められ、権利としても認められるようになることが必要だと彼は主張している。

普通の子供たちが両親の下で自然に覚えることばを、聾啞児たちは苦勞して身につけなければならない。だからこそもっと早くから教育が必要であると彼は考えた。従来の施設の教育者たちは、小さいときは両親の愛情の下にいるのがよく、まだ施設での訓練には耐えられないから、知的な訓練や職業の訓練のためには10歳以後がよいという考えであった。それに対して幼児期からの教育の必要性は口話法の学校によって特に強調されたことであった。E. M. ガローデットはこの点においても教育の新しい時代を見通していた。彼は4年間の初等教育と6年間の高等教育の課程を提案した<sup>7</sup>。

幼児教育に関しては、もう一つ注目すべきことがある。ニューヨーク聾啞院の教師であったD. E. バートレット (D. E. Bartlett) は、1852年そこを退職しみずから自宅を解放して幼児学校を開いた<sup>8</sup>。この教育は1854年には Private School として実践がなされたが、残念なことにアメリカにおいてはこの早期教育の実践は定着しなかった。時代はまだこの実践を受け入れるまでに熟してはいなかった。E. M. ガローデットはヨーロッパ視察の際、リバプール聾啞院の幼児教育部門を観察して感動した経験を持っていた<sup>9</sup>。

## ②手話が使われ過ぎていること

E. M. ガローデットにとってはこの会議の主要な目的はこの手話が使われ過ぎていることへの警告であった。手話が使われ過ぎていること、そして発音の指導がなされていないこと、これが問題として取り上げるべきことであった。

「手話があまりに使われ過ぎる」<sup>10</sup>ということは、これまでも幾度か言われて来た。彼はこの手話があまりに使われ過ぎているという発言の裏に、発音指導が必要であるという勧告を持っていた。というのは従来は、手話が使われ過ぎているという背後には、必ず指文字を使用することが望まれていたのである。もちろんE. M. ガローデットも指文字の使用を勧めていた。

手話は簡単であり、正確に物事を表現できる美しいものであった。だから教師も生徒も絶えず手話を使用するという強い誘惑を持っていた。片方で書記言語の習得の不十分さが指摘され、そのことは手話に頼りすぎることが原因であると見なされていたが、一方では手話が必要とされ大切なものという評価が与えられ、日常のコミュニケーションでは教師にとっても生徒にとっても手話は欠かせないものであった。

「手話の価値を決して低く見るものではない、否むしろ聾啞教育のそれぞれの指導段階において、重要なものであると見るものであるが、新しい言語の獲得においてはその訓練において可能な限りの機会が発音指導に与えられるべきであると考えている」<sup>11</sup>

彼は、聾啞者の人工的言語つまり音声言語の獲得のためには、あらゆる機会をとらえて絶えず訓練する必要があるという。そのためには手話の使用はマイナスであった。

「新しい言語に優先権を与えるべきである。このところに我々の施設の誤りがあるとする。教師も職員もあまりに自由に手話を使い過ぎている。生徒たちはそのコミュニケーションの多くにお

いて指文字の学習をした後までもずっと長く手話の使用がなされている」<sup>12</sup>

聴児が外国にいる場合その国の言葉を使わざるを得ないのと同じように、聾啞児も英語に慣れることが必要であると考えた。

### ③教師の質の低下について

教育の経費を安くしているためにより資質の教師が得られていないと E. M. ガローデットは主張したが、教師の中には反対する意見も見られた。ここではそれほど深まった議論にはならなかったので扱わないが、彼の意見では、初等学校の教師だからと言って低い教養でよい筈はなく、聾啞教育においても高い教養とよい資質を持った教師が必要であると述べている。初期の聾啞施設の教育における言語指導のレベルが今乗り越えられていないと見ていた<sup>13</sup>。

### (2) E. M. ガローデットの提案

彼は従来の伝統的な指導法にこだわる必要はないと言う。先輩に義理立てして従うことはこの自由な国アメリカにおいては不必要であると言う。「発音が今まで採用されたことがないからその要求を拒否する」ということは無意味であり、「ドイツ法はフランス法に劣っている」ということに固執して発音法に反対することも誤りであるとした。もしハイニッケの方法に価値を見いだしたならば、それを実践すべきであると主張したのである<sup>14</sup>。彼はブラッセル女子校の Hon. Canon DeHærne の言を引用している。

「フランス法ドイツ法の両方にその役目がある。一方はもう一方を完全に排除するものではない。一方はもう一方を決して損傷させない。もしお互いにその罪をなすりつけるならば、それぞれがその価値を下げるのである」<sup>15</sup>

むしろ二つの方法を結び付けることは利点を増すと E. M. ガローデットは言う。先ずパントマイムの言葉が聾啞教育の基礎であることはいまでもないことであった。この従来のシステムに発音と読唇の指導を加えることを勧告した<sup>16</sup>。

発音の指導に注目されるようになっていた。ガローデットはこれまでの教育方法では時代の要求におくれてしまうと感じていた。彼はこの会議において出席者に次のように問いを投げかけた<sup>17</sup>。

- ① われわれのこれまでのシステムに欠点はなかったか。
- ② 生徒は言語獲得において失敗していないか。
- ③ 聾啞者は手話や教師に頼る傾向はなかったか。
- ④ 不適切な教師が経費節減のため雇われていなかったか。
- ⑤ 初等教育の期間が短すぎはしないか。
- ⑥ 幼児学級の必要性はないか。
- ⑦ もし発音と読唇が有効なら、我々システムは改良し易いと考えてよいのではないか。

幸いにも、現在のアメリカの聾啞教育のシステムの欠点は除き得る。確固たる哲学の上に立てられたアメリカのシステムは誰も論破できないが、しかし、指導法は改善されねばならない。現在の

聾啞施設の「これまでの威信は危機にある」<sup>18</sup>と訴えた。よい方法はたとえ反対の哲学に立つものでも取り入れるべきであると考えた。

発音指導の導入は、ヨーロッパにおける聾啞施設において徐々に増え続けていること、従来手話法によっていた施設が発音導入を始めたこと、発音法を重んずる施設にあっても、手話が考慮されていたことなどから E. M. ガローデットは、アメリカの施設においても発音指導の導入が望ましいと判断した。発音指導に対する一般の人々の関心が高まるにつれて、聾啞教育の方法がこのままですまされないという危機感を持っていた。このような観点に立って発音の指導を取り入れることを提案したのである。

#### 4 理想の聾学校について<sup>19</sup>

エドワードの考え方が一貫して変わらなかったことを表す論文が残っている。1892年に彼は「理想的な聾学校」について、具体的に説明をしている。

時代は純粹口話法へと進んでいた。1880年のミラノ国際会議の影響は、アメリカには劇的な変化をもたらさなかったとはいえ、各地に通学制の聾学校が増え、また従来 of 寄宿制の聾学校でも確実にスピーチの指導は増えた。1970年代、聾啞院は聾学校と名称は変わり、1890年にはいると聾学校は聾学校と変わっていった。1890年の A. G. ベルの「アメリカ聾スピーチ推進連盟」の結成も口話法の普及に拍車をかけた。エドワードの提唱した併用法は、口話法の失敗者、落ちこぼれのものにとっての手話、という意味合いを強くしていった。このような状況にあって、エドワードが、理想の聾学校をどのようにその心に描いていたかは興味あることである。

その一部を紹介してみる。

- ①聾学校は寄宿制であること。学校が終わった時間外でも聾児には特別な訓練や指導が必要である。大部分の生徒達の家庭ではそのような訓練を受けることができないか、あるいはかなり難しいからである。
- ②聾を教える方法に精通している人の指導下に置かれるべきである。もちろん手話の言語に熟達した人の指導下である。指導者は熱心な宗教的確信をもつ人、神と最高の道徳目標への気持ちを高める資質のあることが必要である。
- ③すべての教師は手話の言語について十分な知識を持つ必要がある。多くは高度な教養ある聴者であるが、何人かは自身が聾である必要がある。
- ④生徒たちが口語教育を始められるクラスが準備され、どの生徒も発音の訓練の機会が与えられるのがよい。
- ⑤疑いなく、発音や読唇が成功するような生徒だけ、口話のクラスで続けるのがよい。
- ⑥手話のクラスの生徒でも、ある程度、スピーチができる見込みのある生徒は、口話の指導が続けられてよい。
- ⑦口語を教えられた生徒であっても、手話言語での授業や礼拝の恩恵を受けるべきである。

⑧手話言語に不信を持ったり、貶めたりすることが許されてはならない。

たとえ、口話のクラスの生徒であっても、学校外での手話言語の使用が禁じられることがあってはならない。

同時に、お互いにスピーチや指文字でコミュニケーションができるように、指導に力を尽くすべきである。

⑨カリキュラムは、普通高校に入れる機会が与えられるよう準備されなくてはならない。そして、高校も過程を通して、ワシントンにあるカレッジに入れるように施策がなされる必要がある。

⑩職業の訓練のためにあらゆる機会が与えられ、生徒たちの芸術的な才能を引き出す機会も与えられなくてはならない。

⑪十分な組織的な体育が準備される必要がある。

⑫教派に捕らわれない宗教教育が中心的、主要な位置づけをもつべきであり、この教育は、聴者がスピーチを通して感銘を受けると同じように、聾者の心と魂に手話言語で与えるべきである。私の意見では、サインかあるいはスピーチかのどちらかを退け、単一の方法をとる聾学校はクラスとしての聾者を教育しうる資格はないと、社会が十分に理解するべきときが来ている。

1840年代から60年代、聾啞院における聾の教師は40%を占めていた。1890年代に入ると聾の教師の割合は、16%に減少し、聾の教師の大部分は、主要教科以外の職業科や寄宿者の舎監などとなっていった。そのような変化する状況にあって、エドワードのこの意見は注目せざるを得ない。古い体質のベテラン教師たちの反対の中、彼はスピーチ指導の導入を勧告し、手話が使われ過ぎることを指摘した。時代は彼の考え方を遙かに越えて、前に突き進んだ。宗教の教育を重要視したこと、スピーチが指導されるものも、手話は必要であるとして、手話に対する偏見のないことがわかる。ここに明確に彼の考えが示されているのである。

## 5. 考察

E. M. ガローデットの教育理念は手話法のそれに立っていた。従って手話が聾啞者にとって、なくてもよいものとは考えてはいない。手話が人格を歪めるものという考えも全くない。

彼には聾者のモデルとして、ソフィアという母親がいた。「彼女は3年間という短い期間の教育しか受けなかったが、家族以外の人々とも豊かな交流をし、言語生活に不便はなかった」そして手話によってすぐれた人物が教育されていると語っている<sup>20</sup>。

ただ音声言語の習得にもっと力を入れることを望んだのである。発音指導によって利益を得るものがそのまま放置されることは望ましくないと考え、出来る限り発音指導を有効に用いようと考えた。だからすべてのものに指導の初期の段階では発音の指導を試みることを望んでいた。そこではもし発音法によって利益が受けられないとわかった場合でも落伍者であるという考えは全くなかった。このことは口話法の理念に立つ場合と対照的である。口話法の理念に立つ場合は、発音のできることが人間として正常な姿であると捕らえていた。併用法の考え方が手話の存在を肯定し、手話を使わないようにと言いながらも、聾啞者の言葉としてそれを認めるところに発音の指導において



の不徹底さがあり、発音指導の成果が上がらなかった原因があった。このことが口話法の側からの批判となり、併用法も結局は手話法と同じであるということに見なされた。しかし口話法の主張者が聾啞児の言語教育に楽観的であったと同様に、併用法の立場に立つ E. M. ガローデットも楽観的な面があったと思われる。

彼は、聾啞施設のリーダーたちの最初のヨーロッパ視察の報告から24年間、正規に公正な実験がなされてこなかったと訴えた。そして手話法に立つ施設の側から発音が有効な場合があるという報告がなされているということに注目させながら、自分の主張していることは決して伝統的なアメリカの考え方に反してはいないと理解を求めたのである。もちろん彼は全体の生徒に対して発音指導が有効であるとは考えなかった。しかし、今日いうところの中途失聴者、難聴者にはもっと発音指導がされ得るとみており、さらに特別な資質を持つ聾啞者も存在する以上、すべてのものに指導の初期の段階では発音指導を試みることを考えていた。(そう考えてはいたが彼のこの会議における提案は、コロンビア聾啞院の理事会へ提出したものよりもずっと穏やかなものになっていることは興味あることである。それだけ心配りが必要であったと言える。)

「口話法による二つの施設ができて、我々のシステムはゆるがない。またそれらの(口話法による)施設の設立者が希望する効果はあがっていない。逆に手話・指文字を取り入れようとしている」<sup>21</sup>と述べている。何度も言うようであるが、彼は両方のシステムは歩み寄るものと判断していたのである。

E. M. ガローデットの提案は、時代の要求に沿うものであった。けれども彼は手話をなくすことが現実的ではないし、発音法の限界をも知っていた。だから、発音指導の効果のないものをも想定したのである。口話法の理念にはそのような想定はあり得なかったのである。

筆者は紀要前巻のNo 3の冒頭に、ガローデット大学では、1988年に聴覚障害の学長が誕生したことを述べた。これまでも聾者の心の支えとして、プライドを持っていた大学であったが、聾者たちは「今初めて筆者自身のリーダーを持つ大学となった」と述べている。これまで、世界中の聾者のメッカとしての役割を果たしてきたことは確かであるが、それは言ってみれば「理解ある聴者の指導」の下という意味あいを持っていたし、聾者たちも感じていたのである。この点から考えると、エドワードは聾者に理解のあるものであったが、「聴者の世界に生きる聾者であってほしい」との願いも、彼の心の中にはあった<sup>22</sup>。現在、主張されている「聾文化と第一言語としての手話」ということから見ると、エドワードの評価はまた違ってくると思われる。しかし、筆者は、聾教育界が口話法一色に向かう時代にあって、聾者の向上を願い、手話言語を大事に考えたことは評価してよいことと考えるものである。

(うえの　ますお　社会福祉学科)

註

- (1) ウィーンのヘブライ口話学校 (Hebrew Oral School for the Deaf in Vienna) で7年間教師としての経験を持った。Berhard Engelsmann が1866年ニューヨーク市に2・3人の聾啞児の教育を始めた。現在の Lexinton 聾学校である。E. M. Gallaudet, *History of the Education on the Deaf in the United States*, A. A. D., XXXI (1886), 114.
- (2) Clark Institution については、上野益雄, “アメリカ聾教育における口話法の成立について” 東京教育大学教育学部紀要, XXII (1976), 117-128. において扱われている。
- (3) 上野益雄, *Ibid.*, 118.
- (4) 上野益雄, エドワード M. ガローデット (1837-1917) の聾啞者観, つくば国際大学紀要 Vol. 3, 1997参照。
- (5) *Gallaudet Encyclopedia of Deaf People and Deafness*, Vol. 1 参照。
- (6) C.ピアード, M.ピアード, W.ピアード, 松本重治, 岸本金次郎, 本間長世訳『新版アメリカ合衆国史』岩波書店, 1969, p. 240.
- (7) E. M. Gallaudet, *The American System of Deaf-Mute Instruction, Its Incidental Defects and Their Remedies*, *Proceedings of the National Conference of Principals*, 1868, 50-51.
- (8) D. E. Bartlett, *Family Education for Young Deaf-Mute Children*,” A. A. D., V (1852), 32-35.  
D. E. Bartlett, *Private School for the Deaf and Dumb*,” A. A. D., IV (1854), 124-126.
- (9) E. M. Gallaudet, *Report of the President on the System of Deaf-Mute Institutions Pursued in Europe*,” (1876), 16.
- (10) L. Rae, *On the Proper Use of Signs in the Institution of the Deaf and Dumb*,” A. A. D., V (1853), 24.
- (11) *Ibid.*, 59.
- (12) E. M. Gallaudet, “*The Ideal School for the Deaf*” A. A. D., Vol. XXXVII (1892), 280-285.
- (13) E. M. Gallaudet, *Milan Convention*” A. A. D., Vol. XXVVI (1881), 15.
- (14) E. M. Gallaudet (1868), *op. cit.*, 48.
- (15) E. M. Gallaudet (1873), *Deaf-Mute “Convention Associations and Newspapers*,” A. A. D., Vol. X VIII, 参照.

Edward M. Gallaudet's View on the Deaf

(continued)

Masuo UENO

Edward M. Gallaudet who was a president of the National College for the Deaf-mute went to Europe for the purpose of the investigating the teaching methods of language for the deaf.

He drew up a report on the state of deaf education in Europe. He made a proposal for the combined method of speech and sign.

What is the combined methods?

What is the substructure of his combined method?

He recommends the speech method to the deaf education. But he loves sign language and relies on the use of sign language both in the classroom and outside. He evaluated that the best method was the one based mainly on sign adding speech to a greater or less extent.

Writer of this article assured that the competent channel of communication is approved sign language of the deaf. His mother, Sophia, had an important effect upon Edward's personality. She was a very good model of deaf persons for him. The real philosophy of Dr. Gallaudet, which recommended the speech, seems to be similar and close to the articulation method. However, that is not actually the case. He proposed the instruction of speech on the basis of the philosophy of the manual method.

Key Word

Deaf, combined method, E. M. Gallaudet,